

令和 3 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名： グループホーム「綾の里」

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370300311		
法人名	医療法人 勝久会		
事業所名	グループホーム「綾の里」		
所在地	〒022-0211岩手県大船渡市三陸町綾里字清水125-2		
自己評価作成日	令和3年11月10日	評価結果市町村受理日	令和4年3月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

周囲を自然に囲まれており、自然豊かな環境で、四季の変化を感じる事が出来る。目の前には三陸鉄道が通っていてホーム内からその様子を見る事が出来る。
畑で野菜なども育てており、入居者と一緒に畑作業や収穫を楽しんだり生き生きとした生活を送っている。
また、運営推進会議は地元の駐在所、分遣所、地区会長などの地域関係者で構成されており、消防訓練では分遣所署員の方が来所され直接助言、指導していただいている。デイサービス、小規模多機能ホームと併設しているので避難訓練を合同で行ったり、緊急時にはお互いに協力し合える環境にある。高台に位置しているので災害面でも入居者、家族、職員の不安も軽減されている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

三陸鉄道綾里駅の近傍にある事業所は、小規模多機能ホームとデイサービスを併設しこの春で開設15年を経過した。大船渡市の三陸町綾里地区は、とりわけ住民相互の連帯感が強い地域であり、事業所の運営にも好影響を及ぼしている。運営推進会議は、利用者家族代表や行政関係者のほか、地域の公民館長、町内会長、民生委員から警察、消防、小学校長と、地域の主だった方々が勢ぞろいし、避難訓練の支援を始め、事業所の応援団として機能している。「共に笑顔で！ 本人のペースを大事に！ 優しいケアを提供します！」を理念とし、笑顔で優しいケアは、利用者から不安を取り除き、利用者との豊かなコミュニケーションを図り、毎日のスケジュールはあるものの、本人の意向で柔軟に対応することとしている。地域と一緒にあって、グループホームの在るべき姿を実現しようとしている事業所である。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和3年12月21日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 ○ 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が ○ 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

事業所名 : グループホーム「綾の里」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	リビングや事務所内に入居者にも見える場所に理念を掲示しており、理念を元に年間目標を立てている。	「共に笑顔で！」を始めとする3項目のシンプルな事業所理念の下に、「利用者と家族に信頼されるケア」を年間の目標として定めている。笑顔でコミュニケーション豊かな職員の優しいケアは、利用者本人の不安をなくし、相互の信頼を高めてくれている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で思うような交流は行えていないが、地元の中学校が閉校、隣地域に新しく開校した。そこに3事業所合同で雑巾を贈呈したり、毎年、地区の清掃活動に職員交代で参加している。	三陸町綾里地区は、従前から地域としての一体感が強く、事業所に対する眼も暖かく協力的である。統合で廃校となる綾里中学の生徒からお別れの手紙をいただき、そのお礼に併設の小規模多機能ホームなどとともに雑巾を贈る程、地域との繋がりは強固である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ホーム便りを近隣の方々や小学校、駐在所などに配布している。また近隣を散歩した際には、近所の方と挨拶をしたり談笑したりとコミュニケーションを図っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に1回開催の予定だが、今年度は1回の開催でその他は書面開催している。書面開催の時は別紙で意見をいただいている。	会議は県の緊急事態宣言が発出された時期を除き、併設するデイサービスの談話室で3事業所合同で開催し、利用者家族に始まり、行政、消防、警察、小学校、公民館、町内会長、民生委員の地域関係者と3事業所職員1名が交代で出席している。委員は事業所での具体的なケアについての関心が高い。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市で行われている地域ケア会議や研修会、地元の助け合い協議会に参加している。小規模と連携を図り、どちらかが参加できない時は参加した職員が伝達をするようにしている。。また事業所で行う運営推進会議に参加して頂き、制度面での助言を頂いている。	行政とは、日頃から関係書類を持参して窓口に出向き、併せて制度上の疑問点等の指導を得ている。事業所は、在宅高齢者を支えることを目的とする「綾里地区助け合い協議会」に委員として参画し、活動に加わっている。	

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現時点で実質的な身体拘束をしている利用者はいないが、転倒防止の為に足元センサーを設置している方が5名ほどいる。また離棟防止の為にドアロック錠も設置しているが介護安全対策委員と連携しセンサーを外すフローチャートを作成したりセンサーをの緩和に向け、カンファレンス、モニタリングを行っている。小規模と合同で身体拘束適正化委員会を開催し、職員による部署内研修会を実施している。	法人作成の指針をグループホーム用に一部修正して指針としている。法人設置の「身体拘束廃止委員会」では、毎年10項目の職員アンケートを実施し、結果を取りまとめ冊子として職員に配布するなどして、廃止に向けて取り組んでいる。管理者は、「ちょっと待って」が時折聞かれることがあるものの、職員は真剣に取り組んでいるとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止委員会も設立され、法人全体で虐待防止の為に指針や虐待発見時のフローチャートを作成中である。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	10月に入居した方が成年後見制度申請中である。成年後見制度の理解と必要な支援につなげる為、12月に市で開催される成年後見制度普及研修会に参加予定である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居申し込みのあった時点で説明、ホーム内の見学をしていただいている。リスクや、少しでも変化のあった際は都度説明している。また利用料金改定があった時は家族来苑時、又は自宅を訪問し説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に投書箱を設置しているが、あまり意見は寄せられていない為、ホーム便りを通して気になる事や要望がある場合は遠慮なく言っただくよう呼び掛けている。入居者へは日常の会話の中で希望を聞いてそれを個別ケアに反映させるようにしている。	面会が制限される中で、家族が事業所を訪れる機会は、受診の付き添い程度であるため、「ホーム便り」や個別のお便りを家族に送り、要望をいただくきっかけを作ってきたものの、これといったものは寄せられていない。利用者の要望は、ドライブが多く、コロナ禍でも頻繁に出かけている。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム「綾の里」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	2か月に1回の部署会議を開き、意見を発信する機会を設けている。参加できない職員は会議担当職員に申し送ったり、申し送りノートを活用したりしている。普段の業務の中でも意見があれば出せるよう配慮している。	事業所の部署会議に限らず、管理者は、毎朝の申し送りや昼の時間に様々な相談を職員から受けている。職員の相談は、利用者の介護に関することが殆どだが、駐車場の舗装、休憩室の設置についても提案を受け、駐車場の舗装は具体化することが出来た。管理者との個別面談は4月と9月に行っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格取得に向けて支援を継続しており、資格取得者には正規雇用採用をする機会がある。今年はいえぼし認定企業の交付を受け、その他に男性の育児休暇制度を設けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	部署内で年度初めに、年間研修計画を立て、職員が講師になり、研修を行っている。講師を行うにあたり自身の振り返りの機会となっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内のグループホーム、小規模の管理者が参加し3か月に1回集まり、情報交換を行なっている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には、ケアマネから情報提供を頂きその情報に基づきながら本人様の要望等に耳を傾け安心できる環境作りに努め、入居後に不安なく生活していただけるよう心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に自宅へ訪問し本人・家族から不安な事や要望等を伺い信頼関係構築に努めている。現在面会制限の為、電話での確認や受診結果報告等の際に定期的にご家族様とコミュニケーションを図り不安や要望等に耳を傾けている。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム「綾の里」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前に実態調査を行なっている。また居宅ケアマネの情報に基づき本人様・ご家族様が必要としているサービスを理解、把握している。職員間で情報共有を行ない本人様が出来る事を説明している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活の中で出来る事を見つけながら役割を持っていただき、生活歴や趣味等から出来る事を生かせるよう援助している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	病院受診結果を家族に報告する際、ホームでの様子を伝えている。また本人と直接電話をして頂く機会を設けている。今年度は、各ご家庭に個人でのお手紙を作成し日頃の様子をご家族様へお伝えしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今年度、行事の縮小や家族の参加は見合わせる等、交流がなくなった為、三か月に一回のペースでホーム行事や日常の様子をお手紙で報告し家族との関係が途切れない様努めている。	遠方に住む家族から時折手紙が届き、返事書きを支援している。毎年暮れには職員の支援を得て、利用者9名全員が家族に年賀状を出すことにしており、名前だけでもと頑張っている利用者もいる。2か月に1度来訪する理容師は、介護士の資格を持っており、毎回利用者を楽しそうに話している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	馴染みの関係作りが出来ており入居者同士で役割分担を行ない掃除や家事を積極的に行なっている。入居者間で協力しあいながら行っている様子が伺える。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	コロナ禍の為、面会はできないが、サービスが終了しても電話で近況を聞いたりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の関わりの中の会話から、本人の思いや意向を把握し、申し送りノート、ケース記録を活用し共有させ、少しでも希望に沿った援助が出来るよう心掛けている。	申し送りノートに記載された利用者の思いや意向は、極力実現するよう努力しているが、家族の事情で思い通りにいかない場合もある。利用者本人の口から話すことが出来ない場合には、家族に確認している。姉妹に会いたい、ペットの火葬に立ち合いたいなどの意向が実現した。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	居宅ケアマネから情報を収集し、実調調査時に、本人、家族から聞き取り確認し、生活環境の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者ごとに日々の観察を行ない、心身状態の変化変化があったら、ケース記録や個人別の申し送りノートに記入し情報を共有している。状態が変化した際にはケアプランの見直しや区分変更している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員からの聞き取り、ケース記録を参考に一ヶ月に一回モニタリングを実施している。リハビリスタッフ、訪問看護師とも連携し、入居者、家族からの要望も踏まえ、心身・生活の変化や生活機能向上に向け、プラン作成に努めている。	担当職員が行った毎月のモニタリングと経過の記録を基に、長期6か月、短期3か月で計画を見直している。見直しに当たっては、管理栄養士の指導も得ている。計画には、①歩行する、②外を散歩、③夜間オムツ屋はリハビリパンツ等の具体的かつ細かい目標を5本程度掲げ、介護の方向性を明確にした上で、次の時期の評価に対応している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者の活動内容や体調の変化、発言や行動を申し送りノートに記録し、共有している。また、多職種(訪問看護師、理学療法士)から助言などをケアプランに反映させている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者、家族の要望に沿えるよう対応に心描けている。医療連携として医療連携記録を活用している。また、報告書には上がらないような「ドキッと事」ノートをホーム独自で活用している。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム「綾の里」

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者の希望に合わせ、近所を散歩している。3ヶ月に1回発行しているホーム便りを家族、近隣住民、小中学校へ配布している。コロナウイルス感染予防の為、入居者との買い物は控えている。月1回の移動図書館の利用、2か月に1回床屋さんに来所し散髪している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者、家族が要望するかかりつけ医を受診し、その都度家族へ結果報告している。	入居前のかかりつけ医に継続して通院している。通院に家族が同行する場合には、事業所で作成した情報提供表を持参している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に一度、訪問看護師の訪問あり、健康チェック・指導を受けている。個人ごとの申し送りファイル・医療連携記録を活用し、情報の共有に努めている。また、状態変化時には、24時間対応可能な看護師直通電話があり、対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	職員・家族・病院関係者と密に連絡を取りながら、入院中の様子を聞きながら職員に申し送っている。状態把握に努め、退院後も安心して生活を送れる様務めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居者の状態変化時には、家族に説明を行なっている。本人・家族の意向を尊重し、重度化に近づく状況では、法人内のクリニックの協力を得て、家族の意向に沿った対応を行ない、介護老人保健施設への入居支援も家族に説明している。	入居時に看取りについて概略を説明し、その時が近づいて来たときは、改めて家族と相談することとしている。法人内で訪問診療や訪問看護を行っており、職員も全員が看取りの経験を有している。職員の研修は、法人全体で受講している。看取りに際して家族が泊まり込むことも可能としている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	訪問看護や隣接している小規模多機能ホームと連携し、マニュアルを作成し、職員同士で意見を出し合いながら定期的に訓練を行なっている。また、通報訓練や離棟発生時のシミュレーションを行った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	早期に災害に対応出来る様に、地元職員が駆け付けるモバイル通信がある。定期的に防災についての研修会を行なっている。夜間の協力体制として、ホーム職員も数名近所に住んでおり、緊急時にも備えている。綾の里施設合同で、定期的に訓練を行なっており、また法人全体の訓練では実際に気仙苑に利用者と一緒に避難する訓練も行っている。数名ではあるが実際10月の暗くなった時間に外への避難訓練を行った。	地域の協力を得ながら、避難訓練に積極的に取り組んでおり、法人合同、綾の里施設合同のほか、夜間想定訓練も手掛けている。職員のグループラインのほか、発災時に備えた自動通報装置もあり、近隣に居住する職員を優先して招集する体制になっている。事業所は、消防の綾里分遣所から数分の距離にある。	夜間想定訓練で明らかになった課題を解決するため、職員だけの机上訓練を行うとともに、散歩の際に非常口を使うことにより、利用者が避難経路を身体で覚えることが出来るよう、日常生活に避難の実際を取り入れることを期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりを尊重し、介助時にはそれぞれのペースに合わせ、丁寧で落ち着いたケアを心掛けている。入居者にも穏やかに過ごして頂ける様、指示的でなく優しい温かい声掛け・対応を心掛けている。	本人の話を否定しない、無理強いしないことを尊厳の基本姿勢とし、本人の好きなように一日を送っていただくことを大切にしている。利用者は、それぞれが持つ裁縫、編物から畑の耕作や魚の捌きまで、得意な技を披露している。利用者の個人記録はタブレットに入力し、職員であれば誰でも閲覧できるようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食事準備・片付けや掃除等、日常生活の中でできることを見つけながら、役割をみつけ生活している。また、生活歴や趣味から本人のやりたい事や希望を叶えられるようにしている。また利用者が自己決定できる様に声掛けなど配慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事準備・後片付けや掃除等の活動も、本人に伺いなから行っている。入居者一人ひとりのペースを大事に、希望や体調に沿って対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	行きつけの床屋で散髪していた入居者もいたが、感染症流行状況もあり、現在は全員ホームで行っている。衣服等は衣替えの時期に家族が持参したり、行事の際は化粧したり、浴衣を着たり楽しんでもらっている。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム「綾の里」

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立作成時は利用者の好みを取り入れたり、旬の食材を使用し季節を感じてもらえるようにしている。ホームの畑で野菜を育て、入居者が自ら収穫した物を提供したり、食事準備や片づけも積極的に行っている。入居者の誕生日には本人に食べたい物を聞いて提供したり、一緒におやつ作りも行っている。	献立は職員が1年前の献立を参考にしながら管理栄養士の助言も得て、1週間ごとに立て、調理専門のパート職員が調理している。利用者は、職員を差し置いて我先にと配膳、下膳、茶わん洗いを手伝っている。今は自粛しているが、コロナ禍前は毎月のように外食に出掛けていた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	定期的に栄養士に栄養管理体制マネジメントを通し、栄養バランスのチェックや献立に関する助言をもらい、日々の献立に活用している。肉が嫌い等の趣向には、代食を提供し摂取量が落ちない様にしている。水分量確保の為、摂取量を記録して確認している。不足傾向にある場合は声掛けや好みの代用品提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、入居者の状況に合わせた口腔ケアを行っている。潜在能力を生かし、出来る所は自分で行ってもらおうようにしている。また義歯を外し紛失したりする方等、職員の方で管理している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を用い、未排便の確認を行っている。仕草などから個人の排泄パターンの把握に努め、尿意・便意の曖昧な方は定期的に声掛けしトイレ誘導を行っている。	利用者のうち7名はリハビリパンツを着用し日中自立しているが、残る2名は尿意がはっきりしないため、職員がトイレに誘導している。夜間のオムツ、ポータブルトイレ利用はそれぞれ1名となっている。水分補給は1日1,000ccを目標とし、その都度確認している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日午前中のお茶の時間と夕食後には乳製品を提供しており、未排便続く方には自然排便促す為、ブルージュースを起床時提供したり、リハビリ体操や外を散歩するなどの支援を行っている。必要時は主治医に相談し、下剤を処方してもらっている。		

令和 3 年度

事業所名 : グループホーム「綾の里」

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	小規模多機能と共同使用しており、グループホームは午後に入浴している。普段入浴を拒否する方には、気が向いた時に曜日に関わらず入浴してもらい本人のペースに合わせている。季節によって菖蒲湯やゆず湯、入浴剤を使用し変化を持たせている。	小規模多機能ホームと共用し、毎週月曜日～金曜日の午後2回又は3回、1人30分程度ゆっくりと入浴している。異性介助を嫌がる利用者はいない。職員は話し相手となりながら見守っている。法人の入所施設での勤務歴のある職員にとって、入浴時間はグループホームらしい、ゆっくりとした時間の流れを一番感じる時としている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の体調を観察し、疲れや眠気等見られたら居室で休む様促している。夜中々寝付けない方には、日中に散歩や体操で活動して頂き、夜安眠できる様支援している。エアコンや寝具による温度調整もその時々に応じ心地よく休めるよう援助している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診時は都度薬の説明書を確認・ファイリングし、いつでも確認できるようにしている。受診内容・処方についても申し送りノートに記載し、全員が確認するまで申し送っている。処方された薬の確認と服薬時は職員2名にてチェック行なっている。訪問看護と連携し状態把握に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	畑仕事が好きな方は畑の苗付を手伝って頂いたり、編み物が得意な方は居室に編み物セットを用意し、自由な時間に取り組めるよう支援している。床の掃き掃除や食器拭きの家事活動も自発的に行なっており、換気扇掃除、窓ふき、雪かきなど行う方もいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は気分転換も兼ね散歩に出かけ、外気に触れたり、草花の変化を感じて頂いている。週に1回ほど夏虫山や尾崎岬へのバスハイクや、希望に応じ個人の馴染みの場所にドライブに出かけている。	コロナ禍が落ち着いてきた10月頃から再び外出を再開している。これまでは、事業所周辺の公園などが主であったが、マスクと換気を励行し少し足を延ばして越喜来の「ド根性ポプラ」などまで出掛けている。利用者の要望で近傍へのミニドライブには、都合がつけばいつでも出掛けている。	

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理はホームで行なっている。入居者にお金を持たせての買い物は行えていないが、時々病院受診の帰りなど必要な物を一緒に買いによる場合もある。感染状況が落ち着いてきているので個別で短時間での買い物も検討している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の様子を心配したり、なつかしむ話題があった時は電話してみませんか？と伺い、希望があれば電話で話していただいたり、葉書や手紙を促し送付している。家族からも郵便が届き涙ぐむ姿が見受けられる時もある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	四季や行事に合わせて共用の空間の飾りを入居者と職員と一緒に作製し飾っている。旬の魚を入居者にさばいてもらったり、自家栽培の野菜と一緒に収穫し眺めたり触れたり料理方法話を合ったりし、生活感や季節感を味わって頂ける様にしている。室温は入居者の希望に合わせて調節している。大きな音、眩しい光等、都度対応し居心地良く過せる様に配慮している。	キッチン、食堂、居間が一緒になった大きなホールは、天井の明かり窓を忘れる程、南面のサッシ戸から陽光が注いでいる。大きなテーブルとソファが配置され、利用者はそこで楽しそうに談笑している。事務室は、小規模多機能ホームと一体的に使えるよう配置され、そこからは廊下と居室の出入りが手に取るように分かるようになっている。暖房はエアコンと床暖で概ね25度に設定されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合った入居者同士は隣同士の席で過ごせる様に配慮し、お喋りに花を咲かせたり居室へ誘ったり誘われたりを行っている。TV脇にソファを置いているので、一人でTV鑑賞を楽しんだり、椅子をウッドデッキ前へ移動し日向ぼっこをしながらのんびりしたりと思思いに過ごせる配慮をしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、ご家族と相談の上、ご本人が使っていた家具や飾ってほしい馴染みの物や写真を置いている。物作りが趣味の入居者には、材料を提供し出来たものを居室に飾り居心地よく過せる様に支援している。	電動ベッド、エアコン、お湯の出る洗面台が備え付けられ、暖房はエアコンと床暖によっている。利用者は、衣装ケースやテレビを持ち込み、どの部屋も整理整頓がなされている。毎朝の居室の掃除を日課としている利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分の部屋が分かるように、入口に名前と写真を掲示している。それを見て「うん、ここだね」と自ら確認している姿もみられる。トイレマークは、廊下のどこからでも見える位置に設置してあるので、迷った場合でも職員がトイレマークがある事を伝えると見つける事ができる。		